

個に応じたキャリア教育を実現するための ファカルティ・ディベロップメントの取り組みVI

— 問題解決力・チームで働く力の育成を目指して —

A Trial Study of Faculty Development to Provide All Types of Students
With Vocational Education Geared to Their Abilities VI

玉田 和恵* ・ 神部 順子** ・ 八木 徹***
近藤 益世**** ・ 松村 豊子***** ・ 古里 靖彦*****

概要

本研究では、社会経験及び基礎学力の乏しい大学生に対して、個々の力を引き出し、基本的生活習慣の確立、社会人としての厳しさに耐えるための心構え、人間性を育むための心の教育、情報と文化を融合させた実践的教養教育を行ってきた。本稿では、2013年度の新たな取り組みとして、問題解決力を育成するために実施した「囲碁による論理的思考力の育成」「実務家招聘講義」「数学勉強会」、チームで働く力を育成するための「情報教育研究会」「サイエンスセミナー」「秋葉原オープンキャンパス」「日本の本質を知るための国会議事堂見学」「情報文化学生互版」の取り組みに触れ、学生がどのような成長を遂げたかということについて述べる。

1. はじめに

1.1 大学生の就職率向上の実態

文部科学省及び厚生労働省は、2013年3月大学等卒業者の就職状況を共同で調査し、2013年4月1日現在の状況を取りまとめて公表した。大学学部の就職率は、93.9%で、このうち国公立大学の就職率は、95.3%、私立大学は、93.4%という結果である。確かにリーマンショック以降、就職率は改善傾向にはあるが、このように高い就職

率が出てくる原因は、国立大学21校、公立大学3校、私立大学38校という一部の優良大学を対象としている上に、就職を諦めてしまった学生を除いた就職希望者を集計対象にしているためである。

平成24年3月の大学卒業生約56万人のうち、正社員として就職できたのは、60%にとどまっている。これに対して、非正社員や一時的な仕事に就いた者、さらには「進学も就職もしていない者」を合計すると、23%を占めている。大学新卒者の就職問題が深刻化している背景には、大学進学率の上昇による大学生の増加といった供給要因がある。大学進学率は、1950年代後半は10%未満であったが、現在は50.8%にまで上昇しており、大卒者が毎年増加している。このように、大学生が増えただけではなく、学力低下といった問題も顕在化している。現在の大学生は「ゆとり

2013年11月30日受付

- * 江戸川大学 情報化学科教授 教育工学
- ** 江戸川大学 情報化学科准教授 情報科学
- *** 江戸川大学 情報化学科専任講師 情報化学
- **** 江戸川大学 情報化学科教授 英米言語文化
- ***** 江戸川大学 情報化学科教授 英語学
- ***** 江戸川大学 情報化学科教授 e-ビジネス

教育」世代で、国際学習到達度調査の結果を見ると、日本の順位は、中学3年生で数学力1位→10位、読解力8位→15位へと低下している。

大学生の学力低下は、入学者の選抜方法が多様化し、一般入試ではなく推薦入試で入学してくる者が増加したことも影響している。推薦入試の入学者割合は、国公立大学でも14%であり、私立大学では41%にもなっている。受験勉強をせずに推薦入試で入学した学生の中には、基礎学力に問題のある者が多く、分数の計算ができないといったことが現実化している。

このように、大学生の学力にはバラツキが大きく、優秀な学生から大学生とは思えない学生まで、玉石混交となっている。従って、大学は卒業生の学力や社会常識に品質保証することが求められており、問題のある学生を再教育する必要があると言われている。就職が難しい偏差値の高くない大学は、地域の実情に合った職業教育を充実させるなどの工夫が必要だと言われている。

1.2 大学に求められる教育

経済産業省では、「企業が採用時に重視する能力」や「経営者が欲しい人材像」に関する調査等を踏まえて、12の要素で構成される社会人基礎力を育成することが重要であると提言している（経済産業省 2006）。

近年、企業現場では、新しい価値を創出するための課題の発見、解決に向けた実行力、異分野と融合するチームワークなどの能力が強く求められている。以前は、社会人基礎力として挙げられている能力については、家庭や地域社会、部活動や集団活動などにおいて自然に育成されるものであったが、家庭や地域の関係の希薄化、教育力の低下などから、これらを自然に身につけることは非常に困難な状況になっている。そこで、これらの力を社会に出る前の段階で育成することも大学教育に求められているのである。

しかし、これら社会人基礎力は、基本的な生活習慣が身につく良識ある人間性と、基礎学力や専門知識が備わった人材にプラスアルファとして求められるものである。社会人基礎力の育成を目指

すと共に、その前提となる力を育成することもより重要となっている。企業は、採用時にコミュニケーション能力を重視しているが、ある程度の基礎学力があることを前提としている。

採用時に、SPIなどを中心とする基礎学力を評価するための適性検査がどの企業でも実施されていることから、企業が基礎学力を重視していることは明らかである。

1.3 情報文化学科におけるファカルティ・ディベロップメントの取り組み

これまで江戸川大学情報文化学科では、学生個々の特性に合わせたキャリア教育を実現するために、ファカルティ・ディベロップメントの取り組みとして、学生の人間性・社会性、教養を高めるための全人格教育を目指した取り組みを6年間に渡って実施してきている。これらの活動は正規科目・非正規科目・その他学生の大学生活全般に渡る指導の取り組みである。

大学教育に求められるさまざまな要請と、情報文化学科のコンセプト、学生の特性に応じた教育を実現するために、以下の目標を達成することのできる教育方法を検討してきた。

①人間性を磨く

- (ア) 人間としての在り方や生き方について考えさせ、人と関係を作る力、自己をコントロールする力を育成する
- (イ) さまざまな課題を発見し、取り組み、問題解決する力を育成する
- (ウ) 情報を収集・分析し、社会の動きを見据えて現実を正しく理解し判断することが出来る力を育成する

②感性を磨く

- (ア) 感性を磨いて、自分の意図を相手に伝えることができる表現力を育成する

③学力を磨く

- (ア) 基礎学力・専門性を磨いて、業務処理に対応できる実践力を育成する

上記の目標を達成し、キャリア形成に向けた教育を実現するために、学生の目的意識や現実社会の厳しさを理解させる「動機付け（心）」、自分の

目標とする職業に就くための就業力を育成する「テクニック（技）」、大学教育で専門性を育成するための「自分を鍛える（体）」という3つの視点で、授業や授業外の様々な活動にITと対面での徹底指導を行っている。

1.4 本研究の目的

本稿では、これまでに情報文化学科で実施してきた個に応じたキャリア教育を実現するための取り組みに加えて、2013年度より取り組んでいる活動を概観する。特に問題解決力とチームで働く力を育成するために、以下の事項を検討する。

- ① 問題解決力を育成するための新たな取り組みの効果を検証する
- ② チームで働く力を育成するための新たな取り組みの効果を検証する

2. 問題解決力を育成する

2.1 囲碁による論理的思考力の育成

2013年度より情報文化特講Iとして、日本棋院より三村芳織二段を向かえ囲碁を導入した授業を始めた。本授業は「モノを考える力」を身につけると共に、粘って勝ち負けに本気でこだわる姿勢を身につけさせることを目的としている。昨今の学生は何に対しても真剣に取り組んだ経験が乏しく、精一杯何かに打ち込んだ経験も、何かをやって悔しい思いをした経験も少ない。本授業科目では、囲碁の授業を通して、真剣に勝負し、負けて悔しがること、社会人としての人間力を身につけさせることを意図している。

囲碁を導入して論理的思考力を育成する取り組みは、2005年に東京大学教養学部での「囲碁で養う考える力」という授業科目から始まっている。その後、青山学院大学、早稲田大学、慶応大学、埼玉大学など様々な大学で囲碁を取り入れて論理的思考力を育成する取り組みが開始されている。

テキストは、東京大学での授業をベースとして作成された「東大教養囲碁講座～ゼロからわかりやすく～」を使用している。授業の方針は、

- ・「石埋め碁」の利用によって、入門の際の敷

居を可能な限り低くしている

- ・「決め打ち碁」によって、授業時間という限られた時間内に初心者が一局を完了できる。また、模範的な打ち方が知らず知らずのうちに見につく。
- ・「囲碁の心得」の形で、対局中に何を考えてよいかわからず途方にくれそうなときに、こういうポイントを重視して考えればいいのかの、指針を与える

というもので、徐々に囲碁のルールや本質的な考え方が習得できるようになっている。囲碁盤も6路盤から始まり、9路盤、19路盤と進んでいき、最終的には本格的な対局ができるようになっていく。

学生は、最初は自分に囲碁ができるようになるのだろうか戸惑いも見せていたが、三村芳織二段の優しい解説や、仲間との対局を通じて、徐々に囲碁での真剣勝負を楽しむことができるように



写真1 三村芳織二段による講義



写真2 真剣に対戦している様子

表1 情報文化特講Ⅲのシラバス

第1回	授業概要説明 次回実務家①紹介・事前業界研究テーマ課題提示
第2回	実務家①講話 株式会社 ティ・オー・エス 代表取締役 伊藤 満 株式会社 トライフォー 代表取締役 広瀬 勝己
第3回	実務家①の振り返り・各自意見発表(課題)レポートまとめ 次回実務家②紹介・事前業界研究テーマ課題提示
第4回	実務家② 野村證券 金融公共公益法人部 藤原誠一
第5回	実務家②の振り返り・各自意見発表(課題)レポートまとめ 次回実務家③紹介・事前業界研究テーマ課題提示
第6回	実務家③ ビットクルー株式会社 インターネット利用者行動研究室 室長 高橋大洋
第7回	実務家③の振り返り・各自意見発表(課題)レポートまとめ 次回実務家④紹介・事前業界研究テーマ課題提示
第8回	実務家④ デルタ航空株式会社 成田国際航空旅客サービス部 アシスタントカスタマーサービス エージェント 蒔苗友香理
第9回	実務家④の振り返り・各自意見発表(課題)レポートまとめ 次回実務家⑤紹介・事前業界研究テーマ課題提示
第10回	実務家⑤ ネットスター株式会社 テクニカルマーケティング部 部長 長谷部一泰
第11回	実務家⑤の振り返り・各自意見発表(課題)レポートまとめ 次回実務家⑥紹介・事前業界研究テーマ課題提示
第12回	実務家⑥ 日本アイ・ピー・エム株式会社 人事 新卒採用 マネジャー 石上博之
第13回	実務家⑥の振り返り・各自意見発表(課題)レポートまとめ
第14回	振り返り・討論
第15回	全体の総括

なってきた。囲碁の責めや守りの考え方は、人生の様々な局面に応用できるものであり、これから学生が立ち向かう問題解決場面で応用できると考えられる。また、楽しい雰囲気での授業が行われているため、楽しく学びながら、論理的思考力を育成できる授業となっている。来年度は、囲碁の時間を拡張して実施することを予定している。

2.2 職業意識の形成

2013年度より、「実務家としてこれから迎える近未来と業界研究～3年後 5年後 10年 20



写真3 株式会社ティ・オー・エス 代表取締役 伊藤 満氏(中央) 株式会社トライフォー 代表取締役 広瀬 勝己氏(右)



写真4 デルタ航空株式会社成田国際航空旅客サービス部 アシスタントカスタマーサービスエージェント 蒔苗友香理氏(本学卒業生)

年後の自分をイメージする～」というテーマで、情報文化特講Ⅲを3年前期に開講した。社会で働く実務家の話を聞くことによって、その業界の動向・業務内容・職務内容・職務の大変さ等を知ることが目的とした授業である。本授業では、自己の近未来や、職業選択・実務家としてどのように生きていくかということについて考える。情報文化化学科に関連する各業界から、各年代の実務家を招聘する。これまで情報文化化学科で実施している特別講義が、既にその業界で功績を成した偉人を招聘するのに対して、本授業が、業界で自身のキャリアを形成しつつある人材の職業に対する想いを現在進行形で知ることが目的としているという違いがある。

授業の進め方は、実務家を招聘する前の授業で、業界及び企業・職務内容について事前研究をした上で、実際の話聞き、次回授業で振り返り及びまとめを行う形式である(表1)。

毎回実務家についてレポートをまとめていくことによって、将来の職業を選択するための視点や方法を知るとともに、自己の研鑽すべき方向性・人としての生き方を考える。

この授業を通して、各業界の動向や職業がイメージでき、職業に就くための学習内容や方法を知り、それに向けて日々何を努力しなければならないかということを確認にする。そして、「自分たちは社会から何を求められているか」ということを痛切に認識するとともに、人としてどう生きていくべきかという目標を確認することを目的としている。

2.3 数学基礎力の育成

2008年度より6年間にわたってキャリア教育の実践研究を行ってきたが、最も困難な項目が基礎学力の向上である。特に学生の数学的基礎力をどう育成するかということが毎年の課題となってきた。もしかしたら、大学生に対して算数・数学の基礎力を育成することは不可能なのかもしれないという不安も生じていた。

そこで、本年度から数学のフォローアップとして数学指導研究員を向かえ、授業時間外に週2時



写真5 数学基礎問題の解説



写真6 机間巡視による個別指導

間、数学の勉強会を実施している。専門ゼミナール・卒業研究のため1、2年生を対象とした情報文化化学科の専任教員の授業科目が設定されていない火曜日の1、2時限目に実施している。数学指導研究員は、日頃は進学塾で小中学生に算数数学を教えているため、数学が分からない生徒が、どこで躓くかということに精通しており、本学科の学生が数学を習得するコツを適宜指導してくれる人物である。年齢も学生に近く、相談もしやすいため毎回多くの学生が受講し、就職活動で必要となる基礎的な数学の課題を演習している。

学生からは「数学が解けるようになって嬉しい」「今までは全然わからなかったが、どう考えたらよいか分かるようになった」という声が聞かれている。数学勉強会が学生の数学基礎力の向上に役立っていることが伺える。

3. チームで働く力を育成する

3.1 情報教育研究会

情報文化学科の教育内容について広く高等学校の先生方に知っていただき、情報教育に関連した交流を深めるために、2013年8月3日に第一回情報教育研究会を開催した。

本学科での情報教育及びキャリア教育についての理解を促進すると共に、次世代を担う若者の情報モラルを含む情報社会での判断力や問題解決力をどう育成するかをテーマとした。参加者の多くは、情報教育に関わる中学・高等学校の教員やネットワークを利用する企業の方であった。今回の研究会では基調講演として「共通教科『情報』で汎用的な問題解決をどう育てるか～『情報的な見方・考え方』を育てるための視点～」というテーマで、生きる力としての問題解決力を育成するた

めの基本となる「情報的な見方・考え方」を東京工業大学松田稔樹先生に講演していただいた。次に、「情報社会での判断力を育成するための情報モラル指導講座」という題目で、本学科玉田が「情報的な見方・考え方」と「3種の知識」を統合した指導法について講演した。講演では、児童生徒の情報モラルに関連した事件やトラブルの多発によって起こる問題を提示した上で、情報モラル教育の重要性を述べるとともに、これまでの研究成果である指導法について紹介した。

また、情報教育で先進的な実践をされている先生方をお迎えして、研究発表及びパネルディスカッションを実施した。研究発表は、千葉県立船橋芝山高等学校谷山佳隆先生による「スクイーク Etoys 当を活用した情報の科学指導例」、実践女子学園社会情報教育イノベーション研究所光永文彦先生による「キャリア教育をテーマとした問題解決能力の育成」、埼玉県立朝霞高等学校春日井優先生による「高等学校情報科におけるeポートフォリオの活用」であった。発表の後、新たな教育や指導法について質疑応答が繰り広げられていた。パネルディスカッションでは、「高校の情報教育の現状とこれからの取り組み」という題目で茗溪学園中学校高等学校大貫和則先生、茨城県教育庁高校教育課指導主事津賀宗充先生、東京都立三鷹中等教育学校能城茂雄先生、茨城県立波崎高等学校茂木孝允先生の4人の指定討論者を中心に討論が繰り広げられた。

当日は多くの先生方に参加していただき研究発表やパネルディスカッションをしていただき、参加した学生は、パワーポイントの魅せ方やプレゼンテーションの仕方を学ぶとともに、情報教育についてより深く興味関心を持つことができた。また、先生方が皆熱心に話を聞かれている様子にも感動したようである。そして、身近にある情報だからこそしっかりと知識や見方・考え方を学ぶことが重要だということを実感し、若い世代が今後の情報化社会を担っていくことになるのだということを感じたようである。



写真7 松田稔樹先生の講演



写真8 パネルディスカッション

3.2 サイエンスセミナー

「コンピュータと化学」をキーワードとして、さまざまな角度から身近な材料を用いた体験・実験を通して視覚的に“カガク”（科学と化学）を楽しむセミナーを2013年8月23日に実施した。科学的な思考力を育成するためのきっかけとして、また、普段疑問に感じる“カガク”の話題を気楽に質問する場として、小学生から大人まで幅広い年代の方々に参加していただくことを目的とした企画であった。

日本のコンピュータ化学界では第一人者の先生方が講師として参加していただき、学生をはじめ小学生から大人まで幅広い年代の参加者に“カガク”の楽しさを教えてくださった。

『立体の化学、折り紙で学ぶ分子の構造』

お茶の水大学名誉教授 細矢治夫

『原子軌道のガラス彫刻』

埼玉大学名誉教授 時田澄男

『エクセルで科学を楽しもう!』

福井工業高等専門学校 吉村忠与志

『極小物質を数千万倍に…』

新潟県立大学 本間善夫

『見えないタンパク質の拡張現実』

福井工業高等専門学校 佐々和洋

豊橋技術科学大学 後藤仁志

『光るまゆ』

埼玉大学 中村恵子

『「みんなのスパコン」TUBAME』

東京工業大学 渡邊寿雄

『空と海の色の秘密にせまろう!』

江戸川大学 神部順子 八木徹

『3D プリンターのデモンストレーション』

合同会社 Genkei 加藤大直 千村宗幹

柳澤裕太

本学科の学生は、各ブースに数名づつお手伝いとして参加し、来場者への説明や実験の補助などを行った。



写真9 ブースでのデモンストレーション



写真10 学生が高校生に説明する様子

3.3 秋葉原オープンキャンパス

社会人基礎力として求められる「チームで働く力」を育てるために、大学から外へ飛び出し、2013年9月8日に秋葉原でオープンキャンパスを実施した。本学科の多くの学生は、社会人となって接客や営業の仕事に就いているため、それを疑似体験するとともに、チームで働くことの大変さや、何に気をつけて自分が動かなければならないかということに気づくことを目的としたイベントである。

当日、荷物の搬出グループは5時半に大学に集合し、トラックへの荷物の積み込みを行った(写真11)。搬出入にあたって、ボランティアとして運転を引き受けてくださった富石博二様、建物の開閉にご尽力くださった釧持敬三様の多大なるご協力に感謝したい。

秋葉原集合のグループは8時集合となっていたが、ほとんどの学生が7時には集合してトラックが着くのを待ち、搬入作業と会場設営作業を行った。秋葉原UDXという貸し会場を借りて実施したため、詳細な設置計画を事前に立てることがで



写真11 大学出発時の様子（午前5時半）



写真13 イベント会場入り口



写真12 秋葉原UDXのイベント掲示



写真14 オープンキャンパスの様子

まず、臨機応変な対応が必須であったが、学生はその場に応じて自分の為すべきことは何かを判断して迅速に動くことができた。

オープンキャンパスが始まってからは、街頭での誘導、受付、会場での案内等、それぞれ自分の

役割を果たして、業務に当たった。また、交代に自由時間を設けて、食事や秋葉原の街の散策を行った。オープンキャンパスには、高校生を始め、大学に興味を持った中学生や社会人の方も来場し、江戸川大学情報文化学科の学びについて理解していただいた。

オープンキャンパス終了後の片付けも迅速で、あっという間に学生相互に連携しながら作業を行った。そのため、片づけを開始してから数十分で終了することができた。参加学生は、チームで働く場合、お互いにどのような声掛けや配慮が必要かということをきちんと学んだようである。

3.4 学園祭

情報文化学科では、1年生から4年生までほぼ全員が参加して学園祭学科イベントを開催している。2013年は、さらにパワーアップして学科全体が盛り上がることを目指した。



写真15 イベントをリードした4年生



写真16 迅速に片付けている様子



写真17 イベント終了時の記念撮影

学科の展示は例年進化を遂げており、「私の時間割」「江戸川ライフ」「偉人履歴書」「デジタル絵日記」「私の故郷」「長崎・ニューヨーク研修報告」「百人一首」「源氏物語」「東海道五十三次」「故郷の詩」など充実した内容であった。鎌ヶ谷高校

から料理研究部の生徒さんたちの参加もあり、クッキー販売で花を添えてくれた。

毎年、さまざまな扮装を凝らして学生はイベントを盛り上げているが、2013年度は学科キャラクター「エドモン」が誕生し、一世を風靡したアマちゃんグループ、往年の人気キャラクターグループなどが学内を回って広報活動に励んだ。そのため、情報文化学科の来場者は2日のイベントを通して述べ415名に上った。これは、学科全員が参加してお互いに協力し合いながら、受付、広報、展示案内などの業務に励んだからだと考えられる。準備、当日、片づけを通じて、リーダー学生を中心に、全員参加で運営に当たり、後輩が先輩を模範にしながら、チームで働くために必要となる力を身につけていったように思われる。最終日の片づけの際も、例年であれば全ての片づけが完了するまでに1時間はかかると考えられていたが、25分という短時間で完了することができた。これは、個々の学生がチームで働く場合にどう動くかというのを考えて行動できるようになった結果だと考えられる。

3.5 日本の本質を見る【国会議事堂見学】

毎年11月に実施している学外研修として、本年度は国会議事堂見学を実施した。2013年11月5日に東京駅に集合して、皇居二重橋、桜田門を経由して国会議事堂に赴いた。当日は9時集合だったにも関わらず、大半の学生が8時には集合場所に到着していた。新しく改築された東京駅駅舎の前で記念撮影を行い出発した。

国会議事堂では、参議院議場の一般傍聴席で説明を聞き、国会内の各所を回り、最後に国会議事堂を背景に記念撮影を行った。その後湯島に移動し、湯島天神で3年生の就職必勝祈願を行った。そして、歩いて東京大学に向かい、学食で昼食をとった。

本活動には、日頃東京へ出向くことの少ない学生を東京へ連れ出すという目的と、日本の中心である国会で社会全体について考えさせるという目的があった。国会見学で、学生は、自分達が今、日本の中心にいること、自分達の生活に関する



写真 18 東京駅丸の内駅舎前出発



写真 19 国会議事堂見学

様々なことがそこで決められていること、自分達が社会や政治に関心を持たなければ社会がどう動くか分からないことを認識したようである。また、朝の通勤時間に東京駅丸の内界隈の企業に出勤する風景を目の当たりにしたため、自分達もあのような立派な社会人になって企業に勤めたいという気持ちを強く持ったようである。

4. 発信力を育成する

4.1 学生新聞（情報文化学生瓦版）

社会人として必要となる「チームで仕事をする力」の中でも、特に創造的な仕事を仲間と共に作り上げていく力を育成するために、情報文化学科では、学生が学科イベントについての新聞を作る取り組みを始めた(図1)。これまでに、「長崎研修」「サイエンスセミナー」「情報教育研究会」「秋葉原オープンキャンパス」「国会見学」「囲碁教室」

「学園祭」「学長表彰」についての新聞が発行されている。文章作成、コラム、チラシ、4コマ漫画、タイトルなどを1年～4年生までの学生が分担しながら作業をしている。この中で、文章作成、コンピュータに関するスキル、仕事の段取りや役割分担、短時間で処理するための方法などをお互いに協同作業を行いながら学んでいる。

どのような記事にするかという目標を設定し、主体的に相手に働きかけながらアイデアを出し合い、誰が読んでも興味関心が湧くような紙面づくりを工夫している。短時間での作業になるので、お互いの連携が重要であり、緊密に連絡を取り合いながら、作業分担を行っている。

これまでは、4年生が編集長を担当して後輩の指導及び業務の取りまとめを行っていたが、卒業論文提出を控えて世代交代し、新たに3年生が編集長を引き継ぎ、1, 2年生を指導しながら、新聞作りを行うこととなった。引き継いだ3年生も1, 2年生も始めて担当する業務が多く、迷っている場面にも遭遇するが、すぐに4年生にアドバイスを求め、4年生も適切に後輩の指導を行い、業務の継承がつつがなく行われているように見受けられる。情報文化学科のこのような活動を通して、学生はチームで働くための力とともに情報発信力を習得していくと考えられる。

4.2 特別講義・インターンシップ

今年度も例年通り、学生の人間性を高め、社会に対す認識を深め、折れない心を育成するために、社会の第一線で活躍している方々の生き様に直接触れるため、職業人を招聘して「特別講義」実施した(表2)。特に「社会が学生に対して何を求めているのか」ということを痛感させ、これまでの意識を変革させ「これから自分たちはどう生きていくべきか」ということを真剣に考えさせるための機会と位置づけて、学生を社会に出すための後押しの一環として実施している。

2013年度は、22名の学生を派遣した。今年度受け入れてくださった企業は表3の通りである。例年、多くの企業の方々にご協力いただき、実際の業務を体験させていただくと共に、社会人にな



図1 学生新聞（情報文化学生瓦版）



写真 20 イヤコムチヨ・ミホ先生



写真 21 長崎平和公園にて

表 2 2013 年度特別講義講師一覧

茨城大学大学院理工学研究科 教授	高妻孝光
内閣審議官兼国土強靱化推進室次長 (前海上保安庁長官)	北村隆志
外国語講師	イヤコムチヨ・ミホ
文化放送 社長	三木明博

表 3 2013 年度インターンシップ先一覧

文化放送 JCN コアラ葛飾 JCN 千葉 JCN 船橋習志野 JCN 足立 ティ・オー・エス	NHK メディアテクノ ロジー 東京メトロ アライドテレシス 千葉銀行 H・I・S
--	--

るための心構えを学ばせていただいている。「礼儀やマナーの大切さ」「コミュニケーション能力の必要性」「業務に必要となる知識・技能が全く自分がないこと」「受け入れてくださった企業の方々、準備を担当した先生方への感謝の気持ち」を修得し、自分たちが多くの人々に支えられながら生きているのだということを体得している。

4.3 長崎研修・ニューヨーク研修

恒例の「長崎研修」には、毎年多くの学生が参加しているが、今年は過去最多の 31 名が参加した。連日、炎天下にも関わらず研修参加者は汗を流しながら『長崎』でさまざまなことを学んだ。出島、野母崎などを巡る長崎めぐりや、原爆資料館、『精霊流し』などを見学し、「長崎市長対談」



写真 22 ニューヨークにて

では、田上富久長崎市長と会食をしながら長崎について、平和について、様々なお話を伺うことができた。「長崎大学」では、長崎大学教育学部のガンガ先生や学生の方々と双方のプレゼンテーションで交流を深めた。学生は平和、歴史、食文化などについて学び体験したことで、多くのモノ

を得ることができた。また、この5日間の研修旅行で新たな課題を見つけ、次なる成長に向けて新たな一歩を踏み出したようである。

「ニューヨーク研修」では、ミュージカルやオペラ、美術館鑑賞など超一流の文化にも触れると共に、ニューヨークで世界中を股にかけて活躍しているビジネスマンから直接話を聴くことによって、大学の中にいたのでは学べない感性を磨いている。

5. 教育効果の兆し

これまで6年間に渡って、個に応じたキャリア教育を実現するために、基本的な生活を営むための生活習慣の確立、人間性を育むための心の教育、情報と文化を融合させた実践的教養教育、社会で働くことを意識させるための職業人講話・企業見学・インターンシップなど、さまざまな取り組みを実践し、効果を上げてきた。しかし、学生が社会人になるための大きな課題として、学力低下ということが数年間の取り組みの中で課題となっていた。そのため、昨年度より学力の向上に主眼をおいた取り組みを多く取り入れるよう努力している。表4に学内でのSPI学力模擬試験の評価分布

表4 SPI 学力模試の評価分布

	1	2	3	4	5
2013年度	19.8	26.2	28.6	33.3	2.4
2012年度	31.2	37.5	20.8	8.3	2.1



写真23 朝の勉強風景

布を示す。2012年度までは6割以上の学生が評価1～2に分布していたが、2013年度は評価3～5に6割以上の学生が分布するようになった。これは、本学科で、学力向上のための取り組みを実践したことと、多くの学生が学科教育の一環として、朝の挨拶後にA棟7階で基礎学力に関する学習を行っていることの成果と考えられる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、社会経験及び基礎学力の乏しい大学生に対して、個々の力を引き出し自己の目標とするキャリアを実現するための教育を実践してきた。本稿では、学力向上と行動力を育成するために、以下の事項を検討した。

- ・問題解決力を育成するための新たな取り組み
- ・チームで働く力を育成するための新たな取り組み

本稿では、2013年度の新たな取り組みとして、問題解決力を育成するために実施した「囲碁による論理的思考力の育成」「実務家招聘講義」「数学勉強会」、チームで働く力を育成するための「情報教育研究会」「サイエンスセミナー」「秋葉原オープンキャンパス」「日本の本質を知るための国会議事堂見学」「情報文化学生瓦版」の取り組みについて触れ、学生がどのような成長を遂げたかということについて述べた。

これらの活動の中から、学生は基礎学力の向上及び論理的思考力の習得、チームで働く場合に必要となる実践的な知識や能力を修得したようである。最も大きな成果としては、5章で述べたように、大学生になっても基礎学力は確実に伸ばせるのだということを実証できたことである。

今後とも、個々の学生の問題解決力・チームで働く力を伸ばすための教育方法をさらに検討していきたい。そのための最大の課題は、A棟7階で学習するための机・椅子の設置数に限界があるという点である。本研究の効果を維持するためには、教員と学生が目の届く場所で学習をすることが必須である。今後その場所の確保について関係各方面に相談をして対応していく必要がある。

謝 辞

本研究は平成 25 年度学内共同研究「基礎学力と行動力を向上させるためのキャリア教育指導法の研究」の支援を受けて行った。関係各方面の皆様へ感謝いたします。また、本研究にあたって、さまざまな方々の協力をいただいた。特別講演会にご協力くださった皆さま・長崎の皆さま、ニューヨークの皆さま、活動を支えてくださった江戸川大学教職員の皆さまに心から感謝の意を表します。

参考文献

- 中央教育審議会 (2002) 中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203/020203a.htm#06 (参照日 2009 年 11 月 10 日)
- 大学審議会 (1998) 「21 世紀の大学像と今後の改革方策について ―競争的環境の中で個性が輝く大学―」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315917.htm (参照日 2012 年 11 月 10 日)
- 大学審議会 (1991) 大学審議会答申「大学教育の改革について」, 文部省
- 経済産業省 「社会人基礎力に関する研究会 中間報告書」
<http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf> (参照日 2009 年 11 月 10 日)
- 国立教育政策研究所 (2007) 「キャリア教育への招待」, 東洋館出版者, 東京
- 厚生労働省 「若年者の就職能力に関する 実態調査」結果
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/h0129-3a.html>
 (参照日 2012 年 11 月 20 日)
- NHK 「視点・論点 『大学新卒者 就職難の実態』」
<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/153810.html> (参照日 2013 年 11 月 20 日)
- 文部科学省 (2000) 「大学における学生生活の充実方策について (報告) ―学生の立場に立った大学づくりを目指して―」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm
 (参照日 2012 年 11 月 15 日)
- 文部科学省 (2013) 「平成 24 年度大学等卒業者の就職状況調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/1335098.htm (参照日 2013 年 11 月 3 日)
- 私立大学情報教育協会 「大学における教養教育」大学教員の授業改善白書 http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2324/3_1.html (参照日 2012 年 11 月 15 日)
- 総務省統計局 「労働力調査」
<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/zuhyou/05401.xls> (参照日 2010 年 11 月 30 日)
- 総務省統計局 「労働力調査特別調査」
<http://www.stat.go.jp/data/routoku/index.htm> (参照日 2010 年 11 月 30 日)
- 総務省統計局 「就業構造基本調査」
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001013823&cycode=0> (参照日 2010 年 11 月 30 日)
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・古里靖彦 (2009) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組み」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 19, 293-303
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦 (2010) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅡ一人間力を育成するための教養教育を目指して」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 20, 203-212
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦 (2011) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅢ―職業人との関わりを通じた成長―」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 21, 245-257
- 玉田和恵・神部順子・八木徹・古里靖彦 (2012) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅣ―基礎学力の向上を目指して―」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 22, 21-30
- 玉田和恵・神部順子・八木徹・城一道子・近藤益世・松村豊子・古里靖彦 (2013) 「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅤ―基礎学力と行動力の向上を目指して―」 江戸川大学紀要「情報と社会」, 23, 13-24
- 柳井 晴夫 (2005), 大学生の学習意欲と学力低下に 1 関する実証的研究, 基盤研究 B